

Title	日本思想史概説(日本思想史研究IV)(村岡典嗣著, 創文社刊)
Sub Title	
Author	太田, 次男(Ota, Tsugio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1962
Jtitle	史学 Vol.35, No.1 (1962. 6) ,p.149- 155
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19620600-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

日本思想史概説（日本思想史研究Ⅳ）

（村岡典嗣著）
創文社刊

筆者はかつて同じくこの欄に於て、故村岡典嗣教授の『日本思想史上の諸問題』（日本思想史研究Ⅱ）を取上げたことがあるが、いま再び、引続いて刊行された遺稿集Ⅳに当る、『日本思想史概説』について紹介し、併せて若干の卑見を述べようと思う。

附録の講義草稿の年表によれば、教授の日本思想史（日本道徳史）の講義のはじまりは、大正八年、広島高師に於てであるが、東北（帝）大に正式に講座が設けられるようになったのが、大正十三年であり、爾来、終戦直後の昭和二〇年、一〇月開講の「明治維新之思想史的意義」（未完・絶筆）に至るまで、終始一貫して日本思想史学の開拓に従事されてきた。今度刊行（昭和六・八・卅二）されたものは、この間、諸大学で行われた講義の中で、通史的性格をもつものが、ほぼ年代順に編集されたものであり、正統『日本思想史研究』をはじめ、これまでの著作が、比較的小冊子である『日本文化史概説』を除けば、個別

研究の纏められたものであるのに対し、はじめて時代順の形式をとった概説として、世にまみえることになったことは、まことに意味深いことといわねばなるまい。

そして、講義年代を追いつつ目を通してゆくとき、そこに繰りひろげられるものは、宛然、日本思想史学の開拓と研究に於ける、苦闘の歴史をみるかのような感を受けるのである。

昭和五年度の講義（日本思想史の問題）の中で、日本思想史という学問が可能であると共に、その困難なる所以が説かれ、「我國の学問界において新しい分野として、真に準拠すべき学説の、ほとんどすべての方面に確立せられていないという事である。

宗教、道徳、学問、文芸等いづれの範圍においても、吾人が考えたような思想史的の研究は、大體においてほとんど成されていないと言えよう。勿論、或は書史の解題的記述や、或は關係事項の年代的記述のたぐいの、思想史研究に擬せられたものはある。しかしそれらは、思想史的研究のための単なる準備にすぎないものに外ならぬ。かくの如き事情のもとにおいては、日本思想史の研究はいまだすべての方向において処女地であるといわねばならぬ。従つて創業者のなむべき苦心が研究の諸方面に存在する」（二〇七頁）とあり、従つて、「かくの如き事情は、日本思想史の研究をして当分特殊研究に限らざるをえざらしめる。今日、何人をもつてしても一人の力で日本思想史の全汎的研究を試みたとする事は到底不可能である。…学者の諸方面に

わたる特殊的研究の業績が相応につまれて後、はじめて全汎的研究がなされねばならぬ。この点からいへば、日本思想史の研究はいまだ特殊研究の時代と言つてよい」(二〇八頁)とあつて、開拓者としての苦心が率直に述べられているが、これは丸山眞男氏のごく最近の発言である「思想史という学問はまだ独立のディシプリンとして市民権が認められているとは言えません」(昭和卅六年・十一月刊『思想史の方法と対象』所収)と比べても、思い半ばに過ぎるであろう。

次に戦時中の昭和十七年の講義(日本思想史の語義、概念及び学問的指向)をみると、とき宛も主観的な日本精神史や精神論の喧伝された頃であるが、そこでは「日本思想史とは最近漸く熟し来つた語である」(二二九頁)と前置してから、先づ語義を検討し、日本に於ける思想の歴史と、日本思想の歴史と二様に考えうるとし、次いで日本思想について触れ、「日本思想とは何か」という事が歴史的研究によつて始めて明らかにせらるべき問題として存するので、…今の状態に於いて、研究者各自の独断を以て日本思想とはかくの如きものときめて、その対象として日本思想史を成立たしめるといふのは学問的態度とはいひがたい。かつ又この立場からして、往々見る如く、一切の外來思想的要素を日本思想史から拒否する時には、事実日本思想史てふものは成立しがたい結果となる。けだし我國民の思想的訓練が殆んど外來思想に依つて、又そをまつて成された事は、到底否定すべからざる事実であるからである」(二三〇頁)と述べられている。いまこれを読めば、特に目新しいことではないが、戦時中にかくも厳正な態度に終始することは、容易のわざではなかつた筈であるが、ここには、性急な、時局への便乗や迎合的態度はいささかもみられない。

また、これまでの講義はすべて明治以前までのものに限られ、それ以後には殆んど触れられなかつたが、終戦直後、一〇月に開講されたときには、特に、始めて明治維新が取上げられている。それは「現在吾人が直面せる思想的状态はその狂瀾怒濤の性質において、またそのうちからほとんど不意識的もしくは半意識的に國民思想が成形を見て行くとと思われる過程において、保守的や進歩的やさまざまの思想の交錯やめまぐるしい変転において、ことに外國的刺戟の力強い作用や支配において、すこぶる幕末から明治初年へかけて我々が経験したところを想起せしめるものがある」(四七六頁) という認識にもとづくものであり、「新日本文化の建設がさげられる時、いわゆる新日本的なる価値は、吾人はすべからず歴史的な研究によつて発見しなければならぬ」(四七八頁)をみれば、終戦直後の社会的混乱に対処すべく、思想史家として、冷静のなかに、異常なる決意が秘められているように思われる。伝統に対する創造の問題や、今後氾濫するであろう民主主義的思想の受容に際して、先づ維新当時の日本を再検討する必要に迫られたのであらう。

このように、終始学的良心に溢れ、単なる思い付きの巧みを排する厳正な学問的態度が堅持されながら、しかも時勢に對しても、鋭敏に反応を示しつつ、豊かな思想的勞作がなされてきた点を、以上の記述から明かにみることができるのである。

一代の名著『本居宣長』は、その刊行は遠く明治四四年、若冠廿七歳の作であり（昭和三年・増訂版刊）、この頃既にその方法的基礎は成つていたと思われるが、その方法的見解は今度所収の分にも、随所に明快に示されている。

青年期の草稿、講演、単行書に、ヘラクレイトスの研究や、ウィンデルバントや宗教哲学の翻譯があることにも示されているように、その学問と教養の基礎はいうまでもなく、西洋哲学であつたが、西洋哲学史の見方から、これまでのわが諸思想の在り方をみると、諸種雑多の思想の併存があるばかりで、相互の関連性にも乏しく、西洋思想にみられるような一つの伝統として、まとまつた構造をもつていない。はじめは、日本思想史なるものについて「具体的に如何なる学問であるかとなると、いまだ明白とはいへない」（八頁）という言葉になるのも無理からぬことであるし、やむをえず「それは哲学史と相似てしかも哲学史とはやや広汎な意味を有している」（同）と規定しているのも、わが諸思想の在り方と、従来の研究段階からすれば、充分理解することができる。

ついでその方法に入るが、文献学者、A・ベークに代表され

るドイツの Philologie と、「それと本質的に一致」（五四頁）する本居宣長を中心とするわが国の文献学的研究法が思想史の基礎として採用される。この両者への傾倒がやがて『本居宣長』に結実したのはいうまでもないであろう。——後記によれば、「晩年、終戦直前のころ、先生は学生に次のように語つておられた。今もし離れ小島に移住するにただ一巻の書を携へることが許されるとしたら君は何を選ぶか、私は本居宣長全集を選ぶ」ととある——ただし、ヨーロッパではこの Philologie が歴史学として発展し、完成されたのに対して、宣長に對しては、中世以後の研究を殆んどしていないことから「最も欠けたのは史的認識である」（五五頁）と批評し、結局、「日本思想史は、實際的に国学の史的完成として成立」（五一頁）することを明かにしている。このように、その方法的見解は、西洋哲学的教養を背景にして、Philologie と国学と、それに独自の鋭い史的感覚とが加わつてできているとみてよいであろう。

確かに、文献に對する厳正なる態度や、「内面解釈」（七六頁）や「内的証拠」（九七頁）というような表現に示される、文献学的広汎な教養の駆使は、いわゆる村岡史学の最も良い特徴になつてはいるが、和辻哲郎博士も指摘するように、「改訂版『日本精神史研究』所収『枕草子について』テキスト・クリティックには比較的消極的であり、——これに對する答えが「穿鑿癖」（一〇六頁）という言葉なのであろうか——この点で、津田左右吉博士の方法と

も相違し(聖徳太子に対する否定的見解への批評をしめ、随所に津田博士への批評がみられる)、また西洋哲学と国学への傾倒は、社会的眼光をやや弱いものにしてあるかとも思われる。もつとも、社会学の思想史学への実際の寄与は、わが国では主として戦後であるといえるので、こういう批評は幾分不当かとも思われるが、教授の学風の最も大きな特徴としての「主要資料の精読、推考」(二〇四頁)を中核として、一点の曇りすら忽にしない厳密さと、徒なる概念的規定や、あるいは「外国思想とのアナロジー」(二〇四頁)に対しても、充分濫用をいましめつつ、予め成心なくして対象に肉迫するという態度が、ここに明確に示されているのである。そして、資料の使用に関して「史料万能論者も、史料軽視論者も等しく誤である」(二〇五頁)という指摘は、その性格の特徴をゆくりなくも示しているかにみえるのである。

つぎに問題になるのは、思想史に於ける時代区分のことであるが、その根本である史観に言及して「元来かかる内容方面からの史観は、我が史学史上もつとも欠けたところであつた」(二二三頁)と指摘し、それ故、思想史にふさわしい独自の時代区分にこれまで定説がなかつたとする。

終戦後の日本、東洋史の両方について、実り豊かな研究成果が挙げられるに伴つて、時代区分の問題も幾度か提案され、その都度、激しい論義が交されたが、日本思想史に於ては、そういう提案はかつてみられなかつた。これは一つには思想史家の

方法、態度、意識が同じではなく、従つて色々の種類の思想史が何くわぬ顔をして併存できるため、一つの本質的問題に向つて関心が集中されて、議論が交されるという習慣が殆んどないことにもよるであろうが、根本的には、思想史学にいわば主体性がなく、一種寄生的性格を脱していないことによるのではなからうか。つまり基礎構造に対する上部構造として、その制約のもとにあるということが、自明の理とされ、従つて、基礎構造に変更が加えられれば、そのまま上部にも反映すると考えられるので、新しい試みが主体的に少しもなされようとしないのである。また、これまでに試みられたものには、一般の関心をひくような、説得力をもつものがなかつたのも事実である。

昭和五年の講義の中には、この問題が取扱われ(日本思想史の時代的区劃観と各期の特徴)在来の諸説が紹介され、さらに自説も掲げられているが、この中で興味をひくものは、津田、平泉両博士に対する批評である。

津田博士への批評は、国民思想の研究に於て、貴族文学、武士文学、平民文学と三大別され、それぞれ、貴族的、武士的、平民的の三分区になつている点であるが、「もし氏の説がこの見地から思想的に上代を貴族的、中世を武士的、近世を平民的とするのであるならば、勿論、一面言得ているところはあるが、余りに形式的で、それらは本質的に何を意味するか明らかにされてをらぬうらみがある」(二一六頁)とある。

構造的に三区分法を認めれば、こうなるのも一応当然のことともいえようが、確かに余りに形式的であり、思想史の内実の表現と必ずしも同じでないことは、誰の眼にも明かであろう。ただこれは、勿論戦前の問題として終つてゐるのではなく、例えば家永三郎博士『日本道徳思想史』（昭和廿九年刊）——これは日本思想史プロパーのものではなく、また、ここでは、僧侶と農民が新たに章を立てて述べられているが——などをはじめとして、これが殆んどそのまま踏襲されているのである。この提案は成程、史学自体としては、必ずしも本質的問題ではなからう。ただ、史学に於ける課題と意識とをふまえ、曾ての主観的な恣意による区分を排しつつ、主体的立場に於て、日本思想史学プロパーの問題としても、その内容に即した区分と名称とが提起されてもよいように思ふのである。

平泉博士の説は昭和三年の「史学雑誌」に掲載された、日本精神発展の段階説である。これに対する結論的批評は「要するに平泉氏の真、善、美および聖という人間の理想の四つの型を日本精神発展の段階に配当しようとした説は、幾多の考慮すべき問題をそのままにして、幾分 artificial に陥つた嫌がある」（二一八頁）として、さらに中・近世について、その不当なことが述べられるが、特に中世に対しては、平泉博士がどちらかといえば、貴族側に立つて、厭世主義的、das Heilige の理想が顕現した時代としたのに反対し、「中世は我国民が真剣に、

現実の世に行動した時代である。政治的にも道徳的方面にも、遊戲的態度を去つて真面目に実行した時代である。……出世間ではなくむしろよき意味の世間的である」（二七頁）と述べられている。これは今からみれば、特に問題になるようなことではないが、当時は貴族中心の立場から、中世を暗黒時代とする見解が相当に行われていたのである。それに対して、早くから武士中心の立脚点が明確に打出されている点に、その違見がうかがえるのである。そして、ここでは、内から出たものでなく、このような、外からの予め出来上つた概念が押つけられることが、特に、最も排されるのであるが、中世に対するこのような史的理解は、保元の乱に中世的精神の源泉を求めようとする見解などと相俟つて、宣長に於ける史的感觉を超えて、寧ろその欠を充分に補つてゐるのである。

これに附随して触れておきたいのは、武士の恩義に対する経済的基礎の問題である。社会経済史的研究が今日ほど進んでいなかったこの頃（昭和六年講義）では、忠や恩義の思想の中に経済的要因を介入させることは一般に喜ばれない傾向であつたが、ここでは明確に「恩義の念が経済的基礎に存したという事はむしろその切実さを物語るもので、決してその故を以て彼等の道徳的情操の虚偽を意味しない」（三九頁）と、まことにエラスティックな瑞々しい言葉が述べられている。まさに教授の史的直覚力は当時の日本思想史学の水準を遙かに超えたもので

あつた。

こういう珠玉の言葉を随所に縷めた『日本思想史概説』が見事に出来上つた。幾種かの概説の原稿の山を綜合して、一書に編集する仕事に携わられた方々の御苦労、御苦心もさぞやと推察されるとともに、深甚な感謝の念を捧げたく思う。

ただ、通読し終つて、この本を机上に閉したとき、日本思想史学に対する一つの疑問——具体的には、この概説を果して通史と見做してよいであろうか——が起るのを禁じ得なかつた。

当分は特殊研究に限るよう、との指摘には既に触れたが、これについては、また「しかしかくいう事は、今日において部門別に、さらに全般的にさえ一汎的研究の全然不可能であるというのでもなければ、また不必要であるというのでもない」(二〇八頁)「特殊的研究の完成をまつてはじめて一汎的研究に入るべしというのでもない」(同)とあり、更に「されば理論的には、いかなる特殊研究にせよすでにそのうちには一方に一汎的研究が予想されておる如くに、吾人の研究においても特殊研究にならんで或程度の一汎的研究がつねに試みられてゆかねばならぬ。一汎的見解が少くとも予想されてゆかねばならぬ。しかして特殊的研究の完成も、また実に一般的研究の成立のうちになされるべきで、両々相交渉してその研究の発展を見るのである」(二〇九頁)とある。後記の述べるところによれば、教授が終戦後意図された仕事の一つに、日本思想史概説の完成(六〇六

頁)があつたとあるし、また同じく「昭和十七年十月には国体思想の構想と思想史の諸問題を相渾じた、独得の通史概説の構想が生れてゐる。この構想はおそらく先生の通史概説最後の構想で、おそらく、先生の方法論の具体的に結晶した体系でもあつたと思われる」(六一二頁)をみれば、通史完成への熱意を充分に窺うことができるのである。

遺憾ながら、未だその最終案には接しえないので、壮大な構想を窺い知ることとはできないが、いまこゝで取り上げようとする疑問は、今度の概説の中の諸講義の組み合わせ方如何というような外形上の問題ではなく、思想相互間の関連性と、それらの、時代的展開への起動性、あるいは拘束性などの、全体として高度な関連に於てとらえられた包括的な通史としての思想史は、日本に於ける諸思想の雑居性と雑多性という、西欧にはみられない独自の在り方の故に、果して真に成り立ちうるだろうかとの疑念である。この思想史学の大先達ですら、容易に手を下し得なかつた課題を真に解決することは、あるいは、既に特定の個人の能力を遙かに超えたことかも知れないのである。

戦後の思想史学の分野には、確かに多くの新風が吹き入れられた。宗教社会学、知識社会学、文化人類学などはその主なものであり、さらに外国人によるかなり優れた著作も現われてきた。それにも拘らず、歴史の他の分野の進展に比べれば、必ずしも未だ実り豊かであるとはいえないのではなからうか。そし

て、方法と態度、意識の上で多くの相違があるうとも、更に一段と高度の協力体制がこれを救う一つの途であるかも知れないのである。こう考えてくると、この度の日本思想史概説は、仮令編纂されたものにしても、独力によつて成し遂げられたものとしては、やはり、稀有のものといふことができよう。

終りに編集委員の方へ、ささやかな希望として、同種の講義の中から一つだけが選択される場合、もし不採用のものゝ中にも、部分的に他のものでは言及されていないような個所があつたときには、それを註の形式に於て採用して戴きたい。

また、今後の編集には周到な御計画が既におありとは思われるが、筆者としては、特に、講義年表にある史学史及び演習ノートの纏められたものを待望する。さらに、戦時中流行の国体論に対して、教授の独自の立場よりなる国体論の展開があれば、これにも接したき旨申添えて擲筆する。〔定価二〇〇〇円〕

(太田次男)

Christopher Brooke,

From Alfred to Henry III. 871—1272.

A History of England. Vol. II.

General Editors, Christopher Brooke,

Denis M. Smith.

Nelson, 1961

新しいイギリス史の大きな概説としては、第一に Oxford History of England, 14 Vols. を挙げるべきであろうし、特にアングロ・サクソン時代を取扱った Stenton 教授の巻は、極めて優れた作品であつて、新しいものを必要としないかに見えるが、何れも可成りの大冊で、初学の者の通読には必しも適してはいない。又 Oxford History of England が、少くも中世に関しては、既に大家の列に入る学者の労作であり、豊富な参考目録を備へ、可成り専門的であるとも言へよう。ここに紹介する Nelson 社出版のイギリス史は、比較的若い世代の学者の手になる全八巻のイギリス史の通史である。又、既刊の分について見れば、各冊手頃な頁数の内に、よくその対象とする時期の特色を捉へているものようである。

ここに取上げたのは、その内の第二巻であつて、Alfred 大